

目 次

- ・ 1999年度 研究例会報告
 - 関西地区例会
 - 『ボストン市立図書館100年史』を翻訳して (川崎良孝)
 - 関東地区第1回例会
 - 韓国の読書推進運動 (宇治郷毅)
 - 埼玉県における移動図書館の展開(1950-1970年代)について (石川敬史)
- ・ 研究例会発表者募集
- ・ 1999年度日本図書館文化史研究会 第16回研究集会・総会 (案内)
- ・ 機関誌について (バックナンバー販売のお知らせ)
- ・ 『図書館文化史研究』原稿募集
- ・ 会員動向
- ・ 事務局から

1999年度 関西地区研究例会報告 (1999年6月18日大阪市立弁天町市民学習センター)

『ボストン市立図書館100年史』を翻訳して

川崎 良孝
(京都大学)

発表者はW. ホワイトヒル著『ボストン市立図書館100年史』(日本図書館協会、1999年1月)を翻訳刊行した。今回の発表は翻訳にまつわる話を、現在のアメリカにおける図書館史研究の動向と結びつけて報告したものである。発表は、(1)現在の図書館史研究の特徴、(2)ボストン市立図書館成立の思想と実際、(3)翻訳についての文献の収集となっていたが、時間の関係上(3)は省略した。発表の内容は幅広く多岐にわたったが、ここでは(1)を中心に簡略にまとめ、(2)についてはごく簡単に触れておく。

(1)「現在の図書館史研究の特徴」では、シェラの民主的解釈、ハリスの修正解釈を視野に入れつつ、個別実証的な研究の時代が続いていると結論した。そこでは(a)「マイノリティの視点からの研究」、(b)「従来の解釈について分野や領域を限定しての精緻な検証」、(c)「刊行文献中心主義の脱却」という傾向がみられるとした。(a)は女性、黒人、移民などの研究が中心となるが、例えば黒人については研

究論文として雑誌に掲載されることも多くなり、1990年代後半には黒人差別と図書館を扱う博士論文が2点執筆され、さらに1998年には *Untold Stories* といった黒人と図書館に限定した単行本の刊行にいたっている。こうした面では着実に成果が上がっているものの、同書はさまざまな執筆者による個別研究論文の合集であり、研究の方向とその到達点を示すものではあっても、図書館史としての全体的な解釈や展望を与えたものではないとまとめた。

(b)「従来の解釈について分野や領域を限定しての精緻な検証」では、以下の研究方向を指摘した。例えば第1次世界大戦と公立図書館の関わりについて、従来はアメリカ図書館協会の「戦時図書館サービス」を中心に研究されてきた。この研究は刊行されている文献やアメリカ図書館協会文書館 (ALA Archives) の資料を中心に「戦時図書館サービス」の実態を組み立て、これが同時に大戦下のアメリカ公立図書館の活動とされた。そうした旧来のやり方に加えて、各公立図書館の方針や実践を探り、各実践を積み上げたのちに、第1次大戦期の図書館を探ろうとする方向がでてきている。また例えば公立図書館はすべての人を対象にするというのが、実際に図書館はどのような本を選択し、それをどのような人がどのように利用していたかは依然としてブラックボックスである。これについては1つのコミュニティを取り上げ、蔵書、登録者、貸出状況をコンピュータに入れ、さらに登録者については職業、年齢、宗教、地位などをさぐり、それらを分析、結合することによって、実際の図書館運営と利用を明らかにするという博士論文がでてきている。これらは「すべての人」、「要求にもとづいた図書選択」といったことの内実を明らかにすることで、既存の解釈なり通説を補強あるいは反証するということになる。

(c)「刊行文献中心主義の脱却」については、従来の研究は多分に刊行された活字文献を中心に、未刊行の文書、手紙、日記などで補う方式であった。最近の方向はこれらを強めると同時に、建物、壁画、備品などを研究に取り込むことで、いっそう「正しい」図書館の像を組み立てようとしている。これには社会史などの影響を得ている。例えば文献に示された文言が実際にどの程度に実質化されたのかについて、文献を追うとともに、そうした文言を実質化あるいはしなかったものとして、建物とかそこに刻まれた壁画や彫り物を分析していくという手法である。最近博士論文レベルで建物を扱った図書館史研究が散見されるが、そうした業績は図書館史研究の再構築にとって重要なものになるとした。

次に(2)「ボストン市立図書館成立の思想と実際」については、「すべての人(特に本を買えない一般住民)」、複本、貸出、夜間開館、「住民の要求する図書」をキーワードとして開館した同館について、その実態の一端を取り上げて問題を提起した。すなわち開館直前に理事会が採択した図書館利用規則を取り上げ、さらに国勢調査などの統計資料を援用することで、実際に貸出の特権を獲得できたのは21歳以上の身元に保障がある住民に限られ、その人数は少なかったのではないかと疑問を呈した。要するに「すべての人」の実態は通説よりも狭かったのではないかとするのである。

(文責：筒井正信：箕面市立図書館
日本図書館研究会)

報告 1

韓国の読書推進運動

宇治郷 毅
(国会図書館)

「韓国の読書推進運動」(レジュメより項目中心に抜粋)

1. 背景

- (1) 80年代の社会状況の変化と「活字離れ」「読書離れ」
- (2) 90年代の読書推進運動(活動)の高揚

2. 韓国の読書推進団体(機関)

3. セマウル文庫中央会

(1) セマウル文庫運動とはなにか

「セマウル文庫運動は、地域住民がいつでもどこでも本を読むことができるように、都市と農漁村そして職場などに設置され、住民の共同の努力で管理・運営される住民のための小図書館運動であり、住民に直接奉仕する読書運動である。」

(2) 沿革 1951: 創立者オム・テソップ氏、巡回文庫活動

1961. 2: 「マウル文庫普及会」創設

1966: 文教部から社団法人設立認可

1977: 監督機関が内務部に移管

1980: 「マグサイサイ賞」受賞(社会奉仕部門)

1983. 1: 「セマウル文庫中央会」に名称変更

1994. 3: 「図書館及び読書振興法」で設立の法的根拠を与えられる

(3) セマウル文庫中央会の活動

イ. 文庫指導育成事業

ロ. 国民読書振興事業

ハ. 教育・広報及び出版活動

(4) セマウル文庫の組織と運営

中央会—単位「文庫会」 現在: 2811(一時は、35,000)

文庫会(会長(1名) 一副会长(2名) 一幹事(若干名) 一会員)

宇治郷氏は、上記「韓国の読書推進運動」に沿っての発表であったが、同時配布の「韓国の読書推進運動と読書指導者養成について」(『図書館雑誌』1999. 4, p. 30 2-03)との重複を避け、冒頭に韓国の読書推進運動の背景と公共図書館との関わりを説明、3. のセマウル文庫中央会の組織と読書推進運動に果たした役割と活動を中心に報告した。その際、「図書館及び読書振興法」(1994. 3)の意義についても言及した。

(記録: 中林)

埼玉県における移動図書館の展開(1950-1970年代)について

石川 敬史

(図書館情報大学大学院)

1950年9月、埼玉県において県立図書館による移動図書館「むさしの」号の巡回が開始された。そのきっかけは、訪問図書館「ひかり」号(千葉県立図書館)の影響によるものであった。巡回当初の活動は、54駐車場に巡回し、3週間1巡回であり、場所により夜は映画会を実施した。当時の主たる利用者層は、15歳から25歳の青年で農業従事者が中心であった。また、活動当初は利用者の反響が高く、移動図書館が「暗夜の一灯」「文化の使者」などと館報等で表現されたように、県民から歓迎され、県内各地より巡回を望む声が高まった。このように、1950年代前半の活動は文化運動的であった。

そしてその後、1950年代後半にかけて車の台数及び駐車場数が増加した。しかしながら、その活動は順調ではなかった。その理由として、①県の財政難、②それによる図書購入費の大幅減額(特に1954年)、③密度の薄いサービス(3週間1巡回)、④町村合併(各市町村の駐車場及び組織の不均衡)、⑤他県の影響(特に長野県の読書普及運動)、⑥青年層の都市への流出、等の要因をあげることができる。そしてこのような要因により、県や移動図書館運営協議会は支部組織を結成し、利用者の組織化などを行い、その主体性はさらに強化され、県内各地において官製の組織的活動が展開された。しかし一方で、平野村(現・蓮田市)や川口市において市町村主体の活動が実施された。

1970年代になると、①急激な人口増加(県南部)、②市町村による移動図書館の台頭、③地域文庫運動・図書館づくり運動、④それによる市町村の相次ぐ図書館設置、等の要因により、県による移動図書館は市町村立図書館設置への過渡的なものであると明確に定まった。そこで、県は市町村立図書館の補完的役割として、一日図書館車(4500冊積載)の巡回を開始した。なお、利用者は母と子で90%を占めていた。このような中、県は県立図書館を1970年から5年毎に3館設立した。しかしながら、桶川市において市民による移動図書館づくりがみられるように、その活動主体が県や協議会から市町村及び市民へ移行しつつあった。

このように、移動図書館の活動は様々な要因により、時代ごとに大きく変化した。

☆ 研究例会発表者を募集しています。

* 関西地区では、まだ定例化できませんので、発表者があれば会を設定します。

* 関東地区では、12月ごろを予定しています。

いずれも、発表時間は質疑を含めて40～50分程度です。中間報告的なもの、情報提供などでも結構です。

希望者は、事務局(石井)までご連絡ください。

1999年度日本図書館文化史研究会第16回研究集会・総会案内

以下の要領で、日本図書館文化史研究会第16回研究集会・総会を開催します。

今回は、第1日目に「『図書館法』（1950）の現代的意義」というテーマに関連した3つの発表とそれを受けての論議を予定しています。第2日目は、5つの自由発表とチャットコーナー、そして総会を行います。また、1日目の夕刻には懇親会を開催します。是非ご参加ください。

日時：1999年9月11日（土）13：00－12日（日）15：30

研究発表会場：法政大学92年館大学院棟301教室。（実行委員会控え室は302教室）

〒162-0843新宿区市谷田町2-15-2 (Tel) (受付窓口)

JR 市ヶ谷駅から徒歩5分（外堀の外側に沿って飯田橋方面へ）「案内図」参照

懇親会会場：法政大学本校舎（55年館）地下第2学生食堂（市ヶ谷・富士見校舎）

〒102-0071千代田区富士見2-17-1 研究発表会場から約5分（外堀内側へ）

参加費（資料費など、当日）：会員500円、非会員1000円

懇親会参加費：3000円程度

プログラム

第1日（9/11）テーマ：「図書館法」（1950）の現代的意義

司会・進行 宇治郷毅（予定）

13：00－13：20 受付（小黒浩司）

13：20－13：30 実行委員会「開会の挨拶」小川徹・研究会代表

13：30－14：30 問題提起・発表1 山本順一：図書館法－過去・現在・未来－

14：30－15：00 休憩

15：00－15：45 発表2 三浦太郎：図書館法制定過程における CIE 図書館担当官の関与について

15：45－16：30 発表3 国立国会図書館法の成立過程について（折衝中）

16：30－17：30 論議と総括

17：45－19：30 懇親会（別会場：富士見町本校舎・55年館B1）

第2日（9/12）自由発表

司会・進行 奥泉和久

9：30－10：10 発表1 若松昭子：19世紀英国における分析書誌学の展開
－ St Bride Printing Library を中心として－

10：10－10：50 発表2 中村克明：「図書館の自由に関する宣言」（1954.5）における「知る自由」採用の経緯について（仮題）

- 10:50-11:30 発表3 山口源治郎：戦前における図書館員の
キャリア形成について
- 11:30-12:10 発表4 小川 徹：改正「図書館令」(1933)の一考察
- 12:10-13:00 昼食
- 13:00-13:40 発表5 伊藤峻(元大田区立蒲田図書館)：1960年代の
大田区立図書館
- 13:40-14:30 チャットコーナー
- 14:30-15:30 日本図書館文化史研究会総会
1999年度活動計画・予算案、1998年度活動・会計報告、その他
- 15:30 閉会(予定)

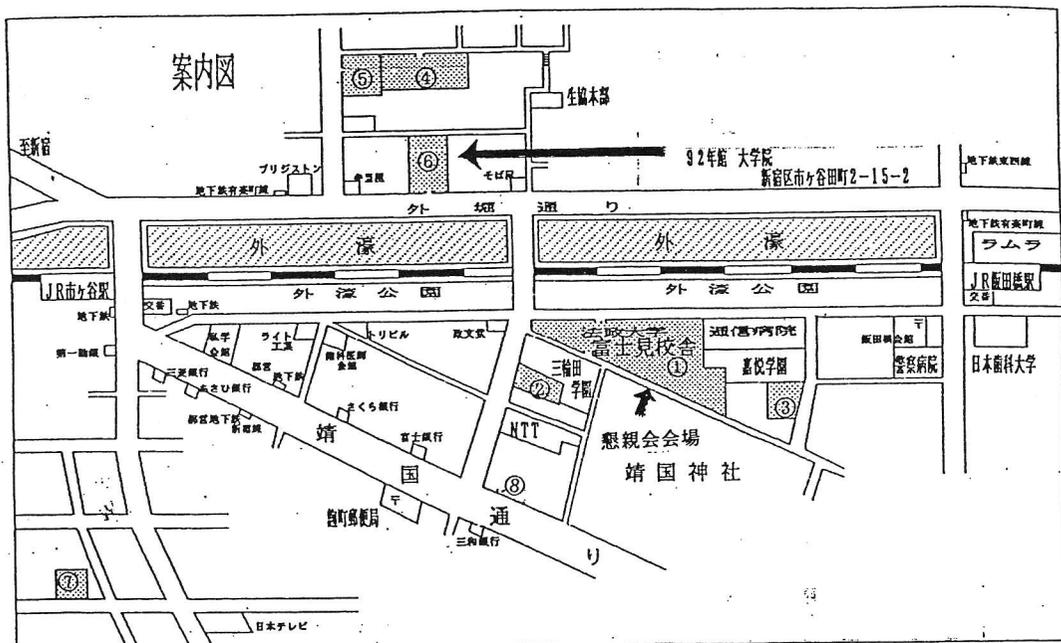
参加申込について

参加希望者は、葉書で下記あてに申し込んでください。

氏名、住所、電話番号、所属、懇親会参加希望の有無を明記してください。

小黒浩司

締切は、9月3日(金)必着とします。



機関誌について（バックナンバー販売のお知らせ）

会員の皆様には、各々の関係しておられる図書館で資料として本研究会の機関誌を備えていただくように働きかけをお願いいたします。資料費の削減など厳しい状況の図書館が多いとは思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本研究会の機関誌「図書館史研究」「図書館文化史研究」の残部を事務局で若干部保管していますが、今回新規会員の方を中心にご希望の方に販売することにいたします。

会員の方に限り、研究集会の会場で2割引きでお分けいたします。8月末までに事務局へお申し込みください。葉書または E-mail で希望の号を指定して申し込んでください。（

）希望者多数の場合は先着順とさせていただきます。送料と発送事務の関係で、今回は郵送での販売はいたしません。在庫の状況は以下の通りです。

「図書館史研究」

1号（1984）4冊、2号（1985）1冊、3号（1986）1冊、4号（1987）2冊、7号（1990）1冊、8号（1991）1冊、10号（1993）2冊、11号（1994）9冊、12号（1995）7冊

「図書館文化史研究」

13号（1996）15冊、14号（1997）9冊、15号（1998）7冊
6，5，9の各号は残部ありません。

（郵送での購入をご希望の方は、研究集会終了後にお問い合わせいただければ、残部の状況をお知らせいたしますが、送料を加算しますと書店で購入される方が安くなる可能性もあります。できるだけ今回研究集会にお出かけいただき入手されることをお勧めします。）

原稿募集

◇『図書館文化史研究』17号（2000年9月刊行予定）の原稿を募集します。原稿の締切は2000年3月31日です。投稿を予定される方は事務局までご一報ください。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。

◇「ニューズレター」の原稿を募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局（石井）あてお送りください。

会員動向

新入会員

会員異動・住所変更

事務局から

◇前号「ニューズレター」第68号の研究集会の発表者等募集要領の記事中で申込先の電話番号が間違っておりました。(誤)

訂正してお詫び申し上げます。

◇今年度の会費納入がまだの方、よろしくお願ひします(前号のニューズレターに振込用紙を同封しました)。

住所変更、異動等ありましたら「通信欄」にご記入ください。

日本図書館文化史研究会 事務局 石井敬三

郵便振替